

聖書：創世記 21：1～21

説教題：笑いを下さる神

日時：2023年10月8日（朝拝）

今日の箇所ではいよいよアブラハムとサラに待望の男の子が誕生します。約束を与えられてから 25 年、長い年月と試練を経て、やっとそのことが成就します。読む私たちもアブラハム夫妻について子どもが授けられたかと思い、ワクワクしながら詳しい状況や様子を知りたいと思います。しかしそういう私たちの期待に反して、この箇所は意外にあっさり書かれています。創世記 12 章のアブラハムの召命から始まり、これだけ待たされ、色々なことがあった上での今日の箇所なのに、イサクの誕生についてはたった 3 節、生後 8 日目の割礼についてもたった 4 節、そして話はあっという間の乳離れの日のこと——これはおそらく 3 歳頃に行われたものと思いますが、——へと一気に進みます。もう少しゆっくり、感動的に書いてくれても・・・、といささか拍子抜けする感覚を持つのは私だけでしょうか。

しかしこうして淡々と記される記録の中にかえってあるメッセージが浮きぼりにされているように思います。この最初の部分で強調されていることは何でしょうか。それは主が約束したとおりに成就したということです。1 節に「主は約束したとおりに」、また「主は告げたとおりに」サラのために行ったとあります。2 節にも「神がアブラハムに告げられたその時期に」とあります。くどいほど繰り返されているのは、これは主の約束の通りに起こったということです。言い換えれば、時が来るなら神の約束はこのように実現するということです。人間は神の約束を信じずに、勝手に焦り、もがき、勇み足を踏み、転んだり、わめいたり、騒いだり、絶望したりしますが、そういった人間の騒々しさとは対照的に神の約束は時が来れば静かに成就する。むしろこの静かな展開の中に神の全能の力が力強く描かれていると言えるのではないのでしょうか。ですから私たちも騒がないで神の約束に信頼し、神の時を待ち望んで歩むように！とこの箇所は私たちを励ましているのではないのでしょうか。

これと合わせてここで強調されているのはアブラハムとサラがどんなに高齢だったかということです。2 節に「サラは身ごもり、神がアブラハムに告げられたその時期に、年老いたアブラハムに男の子を産んだ」と、わざわざ「年老いた」という言葉が付けられています。5 節にも「アブラハムは、その子イサクが彼に生まれたとき、

百歳であった」と記されています。人間的には子を授かることが到底考えられない夫婦です。出産について、そのからだは死んだも同然と言われる状態でした。そんな彼らに神は約束の子を与えてくださいました。そのみわざを覚えてサラは 6～7 節のように語りました。「サラは言った。『神は私に笑いを下さいました。これを聞く人もみな、私のことで笑うでしょう。』」また、彼女は言った。『だれがアブラハムに、《サラが子に乳を飲ませる》と告げたでしょう。ところが私は、主人が年老いてから子を産んだのです。』」 「笑い」と聞いて思い起こすのはアブラハムもサラも、神の約束を聞いて最初は「笑った」と言われていたことです。そんなことはあり得ない。主は何を仰っているんでしょう。そのように彼らは笑いました。そんな彼らに主は生まれる子の名をイサクとつけよと命じられました。イサクとは「笑う」を意味する言葉です。これは彼らが将来、息子の名を呼ぶ時、いつも自分たちの不信仰を思い起こさせられるということでしょうか。しかしこのサラの笑いは違います。彼女は「神は私に笑いを下さいました」と言っています。これは心からの笑いです。喜びにあふれた笑い、神への感謝と一つになった笑いです。サラは「これを聞く人もみな、私のことで笑うでしょう」と言っています。これは皆も一緒にこのことを喜び、笑って祝ってくれるということでしょう。7 節では「だれがアブラハムに、『サラが子に乳を飲ませる』と告げたでしょう」と問います。答えは誰も告げてはいない、神を除いては。こんな高齢の自分が子に乳を飲ませるとは神以外、誰も言わなかった。しかし神の力により、私は主人が年老いてから、このように子を産むことができた！と主をたたえながら笑っているサラです。詩篇 126 篇 1～2 節にこういう歌があります。「主がシオンを復興してくださったとき私たちは夢を見ている者のようであった。そのとき私たちの口は笑いで満たされ私たちの舌は喜びの叫びで満たされた。そのとき諸国の人々は言った。『主は彼らのために大いなることをなされた。』」まさにこれと同じ笑いです。

このサラの喜びに満ちた笑い顔の中に私たちは大きな慰めと希望を見るものです。長きに亘り、深い苦悩と嘆きの中に沈んでいたサラ。その彼女が今、心から笑っています。そしてこれは主が私に作ってくださった笑い顔なのだと言っています。人間には考えられないようなことでも、主にとって不可能なことは一つもありません。時が来れば主は約束を実現し、より頼む者にこのような心からの笑い、また喜びを与えてくださいます。私たちもそのことを覚えて神と神の約束に望みを置いて従う者でありたいと思います。そして神の恵みによってついに心から笑うことのできる人生へ導かれたいと思います。

さて、このイサク誕生の記事はもう一つの記事とセットになっています。それは女奴隷ハガルとその子イシュマエルが追放される記事です。そのきっかけとなったのはイサクの乳離れの日の出来事でした。実はここにもう一人笑っている人が出て来ます。それは誰でしょう。名が記されていませんが、それはイシュマエルです。9節の「からかっている」という言葉には印がついていて、欄外の注を見ると、あるいは「笑っている」とあります。ですからここにも笑っている人がいたこととなります。しかしこの笑いは先のサラの笑いとは違います。ヘブル語では同じ言葉ですが、こちらはからかうという意味であると考えられます。蔑むとか、見下すとか、バカにするという意味の笑いです。17章でアブラハムが99歳の時、イシュマエルは13歳であったと記されていましたが、アブラハムが103歳頃だったであろうこの時、イシュマエルは17歳前後だったと考えられます。イサクが無事乳離れし、アブラハムが盛大に祝っているこの日の出来事は自分にとって何を意味するか、イシュマエルは理解することができる年齢だったと考えられます。その彼がイサクをからかっていました。笑ってバカにしていました。これを見たサラは脅威を感じます。今の時点でこういう関係なら今後イサクの立場は危うくなる。彼はいじめられ、迫害されて、後継ぎになれないかもしれない。そこで彼女はアブラハムに10節でこう言います。「この女奴隷とその子を追い出してください。この女奴隷の子は、私の子イサクとともに跡取りになるべきではないのですから。」このことでアブラハムは非常に苦しんだと11節にあります。それが自分の子に関わることだったからです。アブラハムとしてはイシュマエルも自分の子です。そういう意味でやはりかわいい。できれば一緒に生活し、大事にしてやりたい。そう思っていました。しかし何と12節で神がサラの言う通りにせよ！と言われます。私たちはこれを読んで当惑するかもしれませんが。サラの願いは感情的で、アブラハムの考えの方がより現実的・实际的ではないかと。しかし良く読むと、神が述べている理由とサラが述べている理由は同じです。それはイサクこそアブラハムの跡取りになるべき者であり、神の約束を受け継ぐ子なのだから、ということです。この点でサラの方が本質をよりクリアーに見ていたこととなります。アブラハムの約束を受け継ぐのはイサクです。その彼を脅かし、その立場を危うくしようとする者は、ここに一緒にいることはできない。共に過ごすべきは誰なのかを良く考えなければならない！というサラの主張です。主はアブラハムに、あの女奴隷の子もあなたから出た者だから、わたしは一つの国民とする。だからサラの言う通りにせよ！と言われます。こうしてハガルとその子はアブラハムの家から追放されることとなったのです。

一見厳しく残酷な話のようにも思えます。しかしここには霊的に重要な意味があることを私たちは新約聖書の言葉を通して確認します。新約聖書で触れられているのはローマ人への手紙 9 章とガラテヤ人への手紙 4 章です。ここではごく簡単に触れるにとどめたいと思いますが、ローマ書 9 章 6～9 節ではイスラエルから出た者がみなイスラエルではないこと、アブラハムの子どもたちがみなアブラハムの子孫ではないことが論じられる中で、イシュマエルとイサクのことが取り上げられ、対比されています。どちらもアブラハムの子です。しかしイシュマエルは肉の子どもです。人間的方法、自然的な方法で生まれた子です。一方のイサクは約束の子どもです。ただ神の約束により、人間には全く考えられない仕方で誕生した子です。そんな彼らについて神は今日開いている創世記 21 章 12 節で「イサクにあって、あなたの子孫が起こされるからだ」と言われ、イシュマエルを追い出すべきとしたサラの主張を正しいものとされました。つまり肉の子どもがそのまま神の子ども、神の民なのではないということです。人間的な由来や人間の知恵、人間の力によって神の民となるのではなく、ただ神の恵みと力によって人は神の民とされるという真理がここに示されているということです。

もう一つはガラテヤ人への手紙 4 章 22～31 節です。そこは難解な箇所ですが、言われていることは同じです。そこでもイシュマエルとイサクが対比されています。一方のイシュマエルは肉によって生まれた者です。すなわち人間的方法、自然的な方法によって生まれた者であり、これは人間の力と努力によって神の前に立とうとする律法主義を代表します。これと対比されるイサクは超自然的に生まれた子ども、ただ神により、上からの力により、恵みによって生まれた子どもです。こちらは神の恵みに依存し、信仰による義によって神の前に立つ者を代表します。そしてパウロが創世記 21 章を土台にして言っていることは、この二つは同居できないということです。実際、今日の箇所でイシュマエルはイサクをからかい、嘲って笑いました。ここでイシュマエルがしていたことは神の約束によって誕生し、生きている者をバカにしているということです。それはイコール神を蔑むことでもあります。このように神と神の恵みを蔑み、これに逆らう人は、いくら肉的にアブラハムの子孫と言えども、その家に居続けることはできないというのは当然の帰結です。これは私たちの内側に律法主義と信仰義認を同居させたり混在させることはできないということも意味します。神の恵みにより頼み、信仰の義によって生きる人は、律法主義を自分の中から追い出さなければ

ばならないのです。

さてこうして追い出されるイシュマエルに対して神の憐みがあったということが最後 14～21 節に記されています。ハガルとその子は送り出され、荒野をさまよい、持って来た水も尽きて、生死をさまよう状態となりました。そんなハガルに神はご自身の使いを通して声をかけられ、いのちを支えられます。ハガルとその子は井戸を見出し、元気を回復します。そして主がアブラハムに約束した通り、少年イシュマエルが一つの国民となるよう主は導かれます。彼はたくましく成長し、荒野に住み、弓を射る者となります。後に創世記 25 章 9 節でイシュマエルはアブラハムの葬りをイサクと一緒にに行った記事が出て来ますから、イサクと永遠に別れたのではなかったことも分かります。しかしイシュマエルは信仰に生きた人ではありませんでした。母ハガルも今日の箇所でも苦しみの中で主に祈っていません。少年も声を上げたとは記されていましたが、祈りかどうか定かではありません。そして何よりこの後、彼は信仰とは無縁のエジプト人女性と結婚します。そしてこの後、信仰に歩んでいる者らしい姿は出て来ません。この世的に見れば祝福され、力ある者となり、一つの国民となった彼ではありますが、霊的な祝福があったようには書かれていません。

こうして今日の箇所には約束の子イサクの誕生とともに、彼こそ神の約束を担う者であることがイシュマエルの追放によってよりはっきりさせられています。ここには 2 種類の間人が示されていることとなります。片方は神の約束により頼み、神の約束を待ち望み、神の恵みによって笑いを得て行く流れであり、もう片方は人間の力によって生き、約束の子どもを蔑み、さらには約束を与えている神を蔑み、神の家から追い出される流れ。果たして私たちはどっちに属する者でしょうか。すべての人はこのどちらかです。イサクに属する者か、それともイシュマエルに属する者か。神の約束に目を留め、信頼して生きる者か、それともそれを軽んじて、人間の力、肉の力に頼って歩む者か。私たちは前者の道を行く者でありたいと願うのです。

そして今日の箇所を適用するにあたって最後に短く、もう一步突っ込んで考えたいことがあります。それはサラがイサクを与えられて喜んで笑っている記事を私たちは自分にどう当てはめたら良いかということです。私も主を信じて歩めばサラのように何か良いことが起こって笑えるかもしれないから、そのことを期待して主に従って行こう！ということでしょうか。それでも間違いではないと思いますが、私たちはこの

イサク誕生の記事を単に老夫婦への神からの特別プレゼントというレベルで理解してはならないと思います。このイサク誕生の出来事は神が彼を通してやがてまことの救い主を送ってくださるという約束と一つにつながっているものです。ですからこの記事はやがて約束の救い主イエス様を与えてくださる神の恵みと一つに重なっている出来事であるということです。イサク誕生とイエス様誕生には共通するところが色々あります。イサクは約束の子と呼ばれていますが、イエス様も旧約全体を通して約束された方です。またイサク誕生までアブラハム夫婦は長く待ちましたが、イエス様の誕生はましてやそうです。旧約全期間をかけてその誕生は待たれました。またイサクは奇跡的な仕方、つまりただ神の恵みによって誕生しましたが、イエス様の場合はさらにさらにそうでした。つまりイサクを誕生させてサラに笑いを与えてくださった神は、イエス様の誕生において、その方により頼むすべての者に、今日のサラの笑いが指し示す笑いを備えてくださっているということです。サラの笑いと喜び以上の笑いと喜びを、神は主イエス様において私たちに与えてくださっています。完全な御国ではない、この世で生きている者として、私たちは今なお色々な悩みや戦いの中にありますが、神は救いの約束を果たし、御子キリストにあつて私たちに贖うわざを成し遂げてくださり、ご自身が立てた計画の最終ゴールへと必ず導いてくださいます。そして神の恵みにより頼む一人一人に最高の笑い顔を与えてくださるのです。私たちは神が約束を待ち望む者に与えてくださる祝福をこの記事の中に読み、今や神が主イエスにあつて与えてくださっている救いを心から感謝し、またその主にあつて与えてくださっている笑いを感謝する者でありたいと思います。そしてやがての最後の日には、神が私たちに、心からの、一切曇りのない、最高の笑いを与えてくださることを楽しみにして、神の約束と恵みになおより頼み続ける信仰の歩みを強められて行きたいと思います。